【別紙２】

論文名：**部分床義歯装着による咀嚼能力の変化に影響する因子の探索**（要約）

新潟大学大学院医歯学総合研究科
氏名　菊地さつき

【目的】咀嚼障害を回復することは、欠損歯列に対する有床義歯補綴治療の重要な目的である。有床義歯の装着により、咬合支持の回復による咀嚼能力の改善が期待されるが、その改善度に影響する因子は明らかではない。そこで本研究の目的は、義歯装着時と非装着時の咀嚼能力を客観的に評価し、咀嚼能力の差異に関連する臨床的に評価可能な因子を明らかにすることとした。

【方法】対象者は、2016 年 10 月から 2018 年 7 月までに新潟大学医歯学総合病院義歯診療科または歯科総合診療部に通院する有床義歯装着者のうち、Eichner 分類 B 群に属し、普段から有床義歯を装着している 87 人（女性 57 人、男性 30 人、平均年齢 69.4±8.8 歳）とした。咀嚼能力の変化に影響を及ぼすと考えられる因子とし
て、咬合支持域、咬合支持数、機能歯数、義歯の装着部位、欠損形態を診査した。義歯装着時と非装着時の咀嚼能力を咀嚼能力測定用グミゼリーと咀嚼能力自動解析装置を用いて義歯装着時と非装着時の咀嚼能力を客観的に評価し、咀嚼能率変化率を目的変数として因子の検討を行った。

【結果および考察】義歯装着によって全体としては咀嚼能率値が有意に上昇したが、Eichner B 群の類型ごとに比較すると、B1 群と B2 群においては有意に上昇したものの、B3 群と B4 群では有意差を認めなかった。また、咀嚼能率変化率は、欠損が増加するにつれてばらつきが大きくなる傾向とともに、咬合支持数ならびに機能歯数との間に弱い負の相関を認め、それらが減少するにつれて、ばらつきが大きくなる傾向を示した。また、上顎のみ、または上下顎とも義歯装着している場合は、下顎のみの場合よりも咀嚼能率変化率が有意に大きく改善する傾向を示した。重回帰分析の結果、両側遊離端欠損であることは、咀嚼能率変化率を高める因子であることが示唆された。

【結論】部分欠損歯列患者に対する義歯装着により、咀嚼能力は一定のレベルまで回復されるが、その効果は、残存歯による咬合支持、装着部位、欠損形態によって異なり、特に両側遊離端欠損に対する義歯装着は咀嚼能力を改善しやすいことが示唆された。

【KEY WORDS】咀嚼、咀嚼能率、有床義歯、遊離端欠損

【別紙２】